



現場ですぐ役に立つ実用の書

「写真でみるリハビリテーションの実際(Ⅰ)」

大塚 哲也 著 (厚生年金玉造整形外科病院)

本書はわれわれPTに必要な実技のうち実用的な面で、PT制度制定に伴う一定基準に合致したものをとりあげ、写真をもって解説されている。とくに補装具を各項で用いられているのは、著者が国家試験委員として実技でこの分野を担当され、この面の必要性を考慮されたものと思う。

序文において、「人を指導する以上、まず指導する本人自身が患者の動作も実際にできなければ真の意味の指導ができるとはいえない」と指摘されている。まったく同感である。この意味で始めに理学療法の基礎的な面がとりあげられている。すなわち、患者の指導には正確な計測による判定により、機能障害を発見して、それに適した運動法の実施である。そのために必要な運動の種類、基本肢位および正常運動範囲の熟知が強調されており、運動の目的・注意事項・良性肢位などに加

え、装具の分類と基礎的な面をダイゼストされ、理解度を深めるため写真を用いて解説されている。

疾患別のリハビリテーションの実際面では片麻痺と対麻痺を主体としてそれぞれのグループに属すると思われる疾患がとりあげられている。

片麻痺の分野では脳卒中を中心に一酸化炭素中毒、CPなどが紹介されているが、前者は比較的珍しいものである。この分野では車椅子移動の操作に関する写真解説が今一つ欠けているやに思われる。また、つぎの慢性関節リウマチの訓練に関する写真がないのは残念である。

対麻痺では脊髄損傷が中心となっておりこの分野で写真による解説は十分であり松葉杖訓練はおろか転倒訓練にいたるまで行なわれている。

その他、椎間板ヘルニアおよび骨軟骨症は最近多い症例であり、術後の訓練法が写真解説されると共にプログラムと看護計画表が紹介されて

いるがヘルニアでは術前のマニピレーションならびに腰痛体操もとりあげるべきではなかったか。

進行性筋ジストロフィー症もCP同様扱い方を知るべきで、ここでは徳島大学方式がとりあげてあるが、重要な装具類の写真解説がはずされているのが残念である。

最後にこれらのリハビリテーションを行なうに際し、配慮すべき点を詳述してある。

以上のごとく、本書は実際に必要なもののみをとりあげており、現場の皆さんはもとより受験生の皆さんには実により参考書である。理解という面を考えると、写真を用いたことは光をえたもので、時期的にも大変よろこばれるものと思う。

大阪大学付属病院整形外科リハビリ部

RPT 岩本 敬

B5・114頁・写真117・¥2000

医学書院 刊